中高生とともに差別と闘う

『人権こども塾』レポート　東日本大震災～臓器移植

吉成タダシ（うずしおブランチ代表）

十二月十八日　東日本大震災

「この子はいいから一度話聴くといいよ」知人からの紹介が、ずっと耳に残っていました。二十三歳の彼は、震災当時、中学一年生。聞く側の中学生と同世代です。自分と同世代の人が、あの震災をどう見たのか。それだけでも、子どもたちは親近感を持ったのではないかと思います。

子どもたちと年齢の近い、宮城県松島市出身の彼は、「二万件の事件」として、話を始めてくれました。「街がぐにゃりとゆがんで見えた」子どもらしい表現です。話は、その後の学校での避難生活に移ります。地震によって教室の半分に押しやられた机やイス。窓から見える異様な光景。グラウンドに広がるどす黒い海。漆黒の闇にかすかに見える、空襲のように赤く染まる空。不謹慎に思えた、美しい星空。

そこにいた者にしか分からない光景が、目の前に広がります。それは、私がこれまで聞いてきた震災のお話とはどこか違いました。やはり、体験した年齢によって感じ方が違うのだと思います。その後も、食糧事情、家族の捜索、帰宅の状況について、思い出したくないであろうことについても話をしてくださいました。そして最後に教訓。

①一日の半分は家族と一緒にいない

②学校で被災すると、意外と大人は少ない

③中学生は地域の道を知るプロ

④中学生は学校という避難所を知り尽くしている

そして、「率先避難者となろう」と話してくださり、三時間に及ぶ話を終えました。この三時間というのがよかったのです。通常、話を聞くとなれば、一時間とか一時間半です。しかも、やり取りはあまりありません。話してくれた彼は言いました。「たっぷり時間があって、しかも近くてやり取りがあったことがよかったです」と。ここにも、人権こども塾の良さを感じます。

一月二十二日　SAG徳島

年明けに訪れたのは、鳴門教育大学。そこに、セクシャルマイノリティについて取り組んでいる先生がおられて訪れました。この回はたまたまか、それとも関心の高さからか、参加した子どもたちは十人と増殖。迎えてくれた大学側は、学生メンバーも入れて八人。総勢二十二人という、これまでにない大所帯となりました。

初めは代表の先生からの、セクシャリティに関する「暗黒時代」のお話を明るく。

その後は、大学生を交えてのグループワーク。これまでにないスタイルです。内容も、セクシャリティに関するテーマ。トイレのこと、混合名簿のこと、制服のこと、BL小説やテレビドラマのこと、出てくる出てくる。子どもたちは子どもたちなりに、日常生活で感じてきたことがあって、それを押し留めていたのが学校であるということが、よく分かりました。

この回では、少し年上の、モデルとなる若者たちと出会うことの意義を感じました。しかも、対話的なワークショップスタイルは、やはり子どもたちには有効だということです。それは教育者をめざす学生たちにとってもよかったのではないかと感じました。

二月二十五日　臓器移植

この回は、臓器移植待機のために県外の病院に入院している高校一年生の娘さんに付き添っているお母さんから、オンラインでお話を伺いました。

重いテーマです。しかし、大切なテーマです。

高校生の彼女の心臓に異常が見つかったのは、中学一年生のときでした。精密検査を受けた日から、突然車いす生活になります。前日まで陸上部員としてガンガン走っていたのにです。歩くことさえ、学校で一日過ごすことさえ制限されるようになりました。そのとき通常学級から病弱学級への手続きをしたのが私でした。

一年くらいはそんな生活をしていましたが、移植するしか道はないことがはっきりし、県外の大学病院に入院することになったのです。が、本人の地元高校への進学の意志は固く、入院中も懸命に勉強を続けました。受験は可能なのか、どんな形で受験ができるのか、進学後も単位の取得はできるのか、進級や大学進学は可能なのか。様々な問題に、家族も、私たちも向き合い続けました。

そんななかで過ごしている同世代の子どもがいることを知っておいてほしくて、お母さんに打診をして実現した企画です。

まずは、これら三年間の経緯について話されたあと、入院生活について、また臓器提供の現状についての話を聞きます。一年に一～二回、外出許可が出て出られるのは、病院敷地内の屋外であるということ。院内学級ではいろんな行事があって創意工夫がされているということ。私たちにはまるで異次元の話です。

お話を受けて塾生が言葉を返します。自分が入院生活をしていたときのこと、高校受験で看護科をめざしていること、自分の兄の障がいのこと。

「同じ思いを共有できる仲間がいることの大切さ、つながることの大切さを感じています。移植待ちをしている、同じ立場の小さい子どもへの思いが、気持ちを強くしてくれています。明るい希望に向けて、前向きに頑張っています」

お母さんの言葉に、まだ自分にできることはないだろうか、そんな思いになった学びでした。

（つづく）

イラスト　中島　亜唯